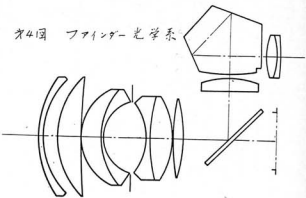


図4 オ フラインダー 光学系



巻上前後を問わず左右いずれの方向にも自由
に回転する。シッター接点は、ダイヤル
の回転により自動切換となり、スピード目
盛の色別によって次のように二つのグル
ープに分れている。

- B、1………130 X接点
F P接点
160………1100

すなわち、それぞれのグループに適した
バルブを使用して、最も簡單、確實に同調
させることが出来る。

その他の一般機構

一作動強度巻上レバーの巻上完了と同時に、
枚数カウンターが一旦盛すつ送られ、
フィルム枚数表示窓の一部に出ている赤マ
ークが消えて撮影準備完了を知らせる。こ
れに関連して、シャッターボタンは巻上完了
後でなければ押せないようになってい
る。

カメラ底面の巻戻ボタンは、一度押すと、
スプロケットのクラッチが外れ、巻戻
中、ボタンを押し続ける必要はなく、
次の巻上により自動的に復元する。
裏蓋を開くと、カウンターはスタ
ートの位置に戻り、次のフィルム装填後
3枚目に1が出で、撮影可能な状態と
なる。

裏蓋は着脱式を採り、長尺マガジン
他、各種アクセサリーの装着に備え、
その着脱装置に、マガジン閉閉機構を
も組込んで、専用マガジンの使用を可
能としている。

フラインダー光学系

ここでは、そのピント面が問題とな
ろう。これは単に測距能力に関するだ
けでなく、各人の好み、被写体および

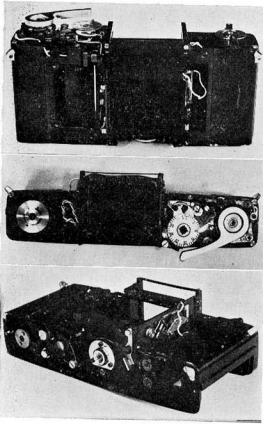
使用レンズの種類等にも大いに関係する。
スプリットイメージは、大口径レンズ使
用時、暗い直線的な被写体を撮影する場
合は明らかに有効であるが、距離計基準長に
相当するものがレンズ口径により制約され
るので、一般距離計並の精度は望むべくも
なく、殊に絞られた状態や口径比の大きい
レンズを使用した場合においては、作面上
最も重要な画面中心のイメージ部が完全
に暗黒となり、被写体を見ることが出来な
くなる。デュオフォーカスもまた同様の傾
向を示し、この種距離計は必ずしも万能
とはなり得ない。さらに、フレネルレン
ズを使用して周辺光量を増大し得ることは周
知の事実であるが、その無数の線のためこ
の部分におけるピント調節は不可能に近く
このため、中心部を平面としたものは、その
境界線が作画上目障りとなる場合が多い。

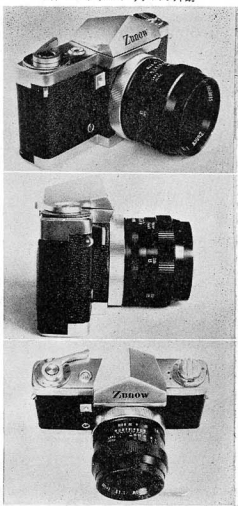
これらピント面を一方向的に強制することは
不合理であり、ズノーベントフレックスに
おいては、交換可能な各種ピント面を必要
に応じて、使用者の好みに応じて、僅か4、
5秒で簡単に交換使用出来る方式をとって
いる。

フラインダー光学系中、そのベントプリ
ズムは、下面を凸面とした特殊のものであ
り、コンデンサー部分を2分して、像の歪
曲を極めて小さくするとともに、広角レン
ズ使用の場合にも、周辺まで中心部と同様
の明るさを保っている。このプリズム系に
よるフラインダー倍率は、標準50ミリレン
ズ使用の時、完全に等倍となる。なお、フ
ラインダー部は、ウエストレベル式に交換
可能なことはない。

その他、専用アクセサリーとして、中間
リング、フォーカベル、複写装置、顕微鏡
撮影装置、専用フラシユガン等も整備中

ズノーベントフレックスの内部





ある。

ズノーレンズ群

大口径レンズの先駆者として自負するズノーは、その独特の設計により、別表の如き各種交換レンズ群を備えている。

一眼レフのレンズとして、世界最高の明るさを持つ58ミリF1.2を始め、50ミリでは日本最高の明るさを持ち、文字通り標準レンズとして、その万能性を發揮する50ミリF1.8、レトロフォーカスの広角レンズとして、完璧な収差補正と、全面に互る極めて高い解像力を誇る35ミリF2.8、大口径長焦点レンズとして望遠に、ポードレイトに、軽量にして、歪曲収差の皆無に近い100ミリF2、これらはいずれもズノー技術陣が絶対の自信をもつて世に問う最高級レンズ群であり、ズノーマウントにより、カメラ本体に内蔵された自動絞機構と簡単かつ完全に連動する。

この他、20センチ以上の長焦点レンズ群、

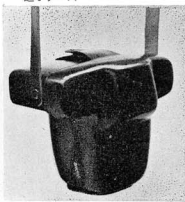
接写、複写用特殊レンズ等も着々と整備されつつある。

デザインについて

従来の一眼レフから脱却し、模倣を排し、独創的にして近代的感觉に富み、しかも工作しやすく、使いやすく、という根本思想のもとに、斯界にその特異な存在を誇るG Kインダストリアルデザイン研究所の、有能なる新進デザイナーの方々の積極的な協力を得て、ここにご覧の通りの外観にまとめ上げることが出来た。

まず、機構上の必要条件を基礎として、ボディのアウトラインを決定するために画かれたオリジナルスケッチ数百枚の中より技術的に実施可能と思われるもの約10点を木型により作成し、実際の撮影条件を加味して詳細に検討した。基本的な線が出るのと、これを基本として、細部に互り、一つ、線一本に到るまで、慎重に検討が加えられ、最後まで遂に残った三つの型を外

連写ケース



たるプリズムカメラ部は、より端的にして独創的な型を創造し、ボディには直線を排し、曲線を探り入れることにより、外面的には優雅さと安定感を増し、内面的にはその強度を数倍に増大した。

かくして完成したデザインは、単純化の中にも高級機特有の重厚さを持ち、一見、距離運動式カメラと見違える程のスマートさを見せている。

親的には、その質感に到るまで完成品と寸分違わぬ金属模型とし、各方面の意見をも採り入れて現在のものに到達した。一カ年の歳月を費したこの間作成したスケッチおよび図面は数千枚、木型数十型に達した。

複雑な機構を単純なフォルムに納め、ボディを最小の大きさにまとめて大口径レンズをありのままに強調すると同時に、一眼レフ最大のポイント、ボディには直線を排して曲線を探り入れることにより、外面的には優雅さと安定感を増し、内面的にはその強度を数倍に増大した。

さらに、デザイン面より見たこのカメラの連写ケースに目を転じて見よう。これまで、一眼レフの連写ケースは、すべて、一般カメラの型をそのまま採用しているため使用上にかねるべき無理を伴わない、かつデザイン的にも見えるべきものがなかった。このカメラの連写ケースは、一般觀念にとらわれず、カメラデザインと同様の根本思想のもとに、ペンタ式一眼レフの機能を端的に表現したものであり、独特の形態美と従来のものに数倍する使いやすさを具えている。一般的にいって、従来のカメラケースは各交換レンズの重さの差を無視したものであり、レンズの種類により、これを保持した場合のケースの傾きはその都度変化し、安定性を欠くきらいがあった。殊に一眼レフはその構造上、レンズ鏡筒が長くかつ重くなる傾向が強く、これを従来の方式にて保持すれば、レンズ部分の突出と、ケースの傾きにより、携行上種々の不便を生ずることは明らかである。この点にについては、本機のケースは、レンズ部を下方に向けた状態で保持されるため、いかなるレンズを用いる場合でも、ケースの方向は一定となり、常に安定した保持が可能となる。

以上がズノーペンタフレックスの概要であり、なお、細部に互つては、説明を要する箇所が多々あると思われるが、すでに予定の枚数も尽きたので、ここに説明出来なかつた各種機構や詳細なデータはまた別の機会に譲りたいと思う。この稿が、幸いにして、今後の一眼レフの動向を示唆する何かを含むとすれば、筆者の喜び、これに過ぐるものはない。